

## [課題演習報告]

# 児童の対話力を高める「ダイアログの時間」の実践 —社会性と情動の学習プログラム「SEL-8S」を用いて—

野 津 久 美 恵

Kumie NOTSU

福岡教育大学大学院教育学研究科教職実践専攻生徒指導・教育相談リーダーコース  
福津市立上西郷小学校

(2022 年 1 月 12 日受理)

本研究は、文部科学省研究開発指定校として在籍校に設置された新領域「ダイアログの時間」において、年間カリキュラムの作成と児童の実態に合わせた SEL-8S プログラムの指導案・教材を作成し、児童の対話力向上に効果があるかどうかを検証した。研究Ⅰでは、試行的に第3・4学年に実施したところ、社会的能力の8つの下位尺度の中の「自己への気づき」「対人関係」で、社会的能力の低い児童の得点が上昇し、「他者への気づき」で、社会的能力が中間位にあった児童の得点が上昇していた。また、対話力を構成する3つの下位尺度において、児童の得点が有意に上昇した。研究Ⅱでは、全学年に実施し、統制群と比較したところ、社会的能力について、3・4年生は「自己への気づき」「生活上の問題防止」で、5・6年生は「自己への気づき」で、実践群の児童に得点の有意な上昇が見られた。また、対話力の児童自己評価と教師による他者評価において、下位尺度の得点に有意な上昇が見られた。このことから、児童への SEL-8S プログラムの実践が対話力向上の一助となることがわかった。

**キーワード：** 対話力，社会的能力，社会性と情動の学習プログラム「SEL-8S」，「ダイアログの時間」

## 1 研究主題についての説明

### (1) 主題設定の理由

現在、Society5.0に向けて、自己の主体性を軸にした学びに向かう能力や人間性が問われている。文部科学省(2018)は、その中で、特に共通して求められる力の一つとして他者と対話する力が必要であると挙げている。

在籍校は令和元年度から同5年度まで、文部科学省研究開発指定校に認定され、Society5.0に向けて求められる力として、「英語力」「対話力」の2つの力の育成に特化し、新教科「英会話科」と新領域「ダイアログの時間」を設置した。在籍校は、1学年20人程度の単学級で構成される、小規模校である。学級内外での人間関係づくりの苦しさ等の課題があり、円滑な対人関係に必要な社会的能力(態度・言語)の習得や応用が望まれている。

こうしたことから、「英語力」育成の基盤となる「対話力」に注目し、英語・日本語を用いてコミ

ュニケーションをする力及び対話力等の社会的能力の育成を目指す在籍校の取り組みに貢献したいと考える。

### (2) 研究主題の意味

主題の「対話力」とは、「多様な他者と円滑にコミュニケーションを図る態度や能力」と定義する。相手の話を傾聴し相手の立場に立って考えたり、新たな気づきやよりよい価値観を生み出したりする姿が対話力の高まりのある児童の姿と考える(上西郷小学校, 2020)。また、「ダイアログの時間」は、「対話スキル学習」と「対話学習」とで構成され、本研究ではこの内、「対話スキル学習」において、他者とコミュニケーションをする上で必要なスキルトレーニングの実践を行う。「対話スキル学習」は、朝の活動として行う15分間の「モジュールの時間」と、月1回1単位時間の「ロングの時間」を関連させて行うものである。教育課程の特例として、「ダイアログの時間」の時数については、国語科「話す・聞く」、生活科、総合的な学習の時間、社会科の内容を精選し、それらから一部の時数

表 1 在籍校の教育課程時数表

	各教科の授業時数										道徳科 外国語活動	総合的な学習の時間	特別活動	新教科・新領域		総授業時数
	国語	社会	算数	理科	生活	音楽	図画工作	家庭	体育	外国語				英会話科	時間 ダイアログの	
第1学年	248 (-58)		136		92 (-10)	68	68		102		34			34 (+34)	34 (+34)	850
第2学年	255 (-60)		175		95 (-10)	70	70		105		35			35 (+35)	35 (+35)	910
第3学年	205 (-40)	60 (-10)	175	90		60	60		105		35 (-35)	0 (-20)	50 (-20)	35 (+70)	70 (+35)	980
第4学年	205 (-40)	80 (-10)	175	105		60	60		105		35 (-35)	0 (-20)	50 (-20)	35 (+70)	70 (+35)	1015
第5学年	140 (-35)	90 (-10)	175	105		50	50	60	90	0 (-70)	35		45 (-25)	35 (+105)	105 (+35)	1015
第6学年	140 (-35)	95 (-10)	175	105		50	50	55	90	0 (-70)	35		45 (-25)	35 (+105)	105 (+35)	1015
計	1193 (-268)	325 (-40)	1011	405 (-20)	187	358	358	115	597	0 (-148)	209	0 (-70)	190 (-90)	209 (+419)	209 (+209)	5785

※令和元年度研究開発実践報告書(1 年次)をもとに 報告者が作成

※(+)-…一昨年度より増加した時数、(-) …一昨年度より減少した時数

※ダイアログの時間(35 時間)=[対話スキル学習(モジュールの時間(15 分×3)]10 時間

+ [対話スキル学習(ロングの時間(月 1 回 1 単位時間))]11 時間+ [対話学習]14 時間

を移行している(表 1)。

副主題「社会性と情動の学習「SEL」」とは、「自己の捉え方と他者との関わり方を基礎とした、社会性(対人関係)に関するスキル、態度、価値観を身に付ける学習」と説明されている(小泉, 2011)。SEL のうち、8 つの社会的能力の育成を目指した学習プログラムが SEL-8S プログラム(以下、SEL-8S)である。8 つの社会的能力とは、対人関係において基礎となり、汎用的で日常のさまざまな生活場面で必要な 5 つの「基礎的社会的能力」と、基礎的社会的能力をもとにした、より複合的で応用的な 3 つの「応用的社会的能力」で構成される。また、これらの社会的能力を育てるために、表 2 のような A~H の学習単元が設定されている。

### (3) 研究の目的

本研究は、児童の対話力を高めるために、「ダイアログの時間」の年間カリキュラムを設定し、「ダイアログの時間」の中の「対話スキル学習」用に、児童の実態に合わせた SEL-8S の指導案・教材(以下、SEL-8S 追加指導案・教材)を作成して実践し、その効果を検証することを目的とする。

## 2 研究 I

### (1) 目的

在籍校 3, 4 学年において、「ダイアログの時間」

表 2 8 つの学習単元で育成を図る社会的能力(小泉, 2011)

社会的能力	学習単元	学習単元							
		A 基礎的 生活習慣	B 自己・他者へ の気づき・関心	C 伝える	D 関係 づくり	E ストレス マネジメント	F 問題防止	G 環境変化 への対応	H ボラン ティア
基礎的	自己への気づき		○			○		○	
	他者への気づき		○						○
	自己のコントロール	○		○	○	○	○		
	対人関係	○	○	○	○		○		
	責任ある意思決定			○			○	○	
応用的	生活上の問題防止のスキル						○		
	人生の重要事象に対処する能力							○	
	積極的・貢献的な奉仕活動								○

の年間カリキュラムを作成し、SEL-8S 追加指導案・教材による試行の効果を検証する。

### (2) 方法

#### 実施期間

2020 年 8 月～2020 年 12 月

#### 対象

在籍校 3 年生児童 21 名、4 年生児童 24 名、教師 12 名

#### 実施計画

SEL-8S プログラムを配置した、第 3・4 年の年間カリキュラムを作成する。これにもとづいて、「ダイアログの時間」の対話スキル学習ロングの時間での SEL-8S 追加指導案・教材を作成して実践し、有効性を検証する。

#### 測定内容と測定方法

「小学生版『社会性と情動』尺度」(田中ら, 2011)、自作の「児童用対話力アンケート」(後述)を用いて、実施前と実施後に調査を行った。また、各授業実施後に、児童に対して、「スキルのポイントの理解」「ポイントを意識したエクササイズの有無」「ポイントの活用」について自己評価(4 件法)を行った。さらに、対象学級の教師に「SEL 8 つの能力[教師による評定]」、自作の「教師用対話力アンケート」(後述)を行い、実施前、実施後に個々の児童の変容について調査を行った。加えて、算数科の時間における学習中の児童の様子を観察し、話すことへの学習意識、聴き方の変容を調査した。分析には、心理統計分析用のソフトウェア HAD(清水, 2016)を用いた。

#### 実践の具体的内容

##### ①評価指標の作成

実践の効果検証のために、在籍校の研究推進部と検討し、「児童用対話力アンケート」と「教師用対話力アンケート」を作成した。これらは、在籍校が系統的・発展的な目標設定の指針として作成した「領域別目標到達度一覧表」をもとに、対話力を「話すこと」「聴くこと」「話し合うこと」「関係づくり」の 4 つの領域とその領域をより細かに分けた 9 つのスキル(話し方スキル、伝えるスキル、

聴き方スキル、質問スキル、考え方スキル、話しスキル、挨拶スキル、対人関係スキル、自己コントロールスキル)で構成されるものとした。そこから、低・中・高学年の発達段階に即して評価できるように、具体的な子どもの姿を表しながら、児童自己評価用の「児童用対話力アンケート」(低学年 16 項目、3 件法)(中学年・高学年 18 項目、4 件法)と、教師評価用の「教師用対話力アンケート」(9 項目、5 件法)を作成した。

## ②年間カリキュラムの作成

研究推進部と検討し、3・4 学年「ダイアログの時間」の年間カリキュラムの作成を行った。年間カリキュラムには SEL-8S を配置し、対話力の 4 領域と対話力を細分化した 9 つのスキルを追記した。また、学んだ対話スキルを定着させるために、他教科・領域、学校行事との関連も組み込んだ。

## ③SEL-8S の追加指導案・教材の作成、試行

年間カリキュラムをもとに、「ダイアログの時間」の対話スキル学習ロングの時間における 3・4 学年の SEL-8S 追加指導案・教材を作成・提案した。

試行として、授業は報告者が T1、学級担任が T2 を担当した。そのうち、4 回目の授業は、報告者がコンサルテーションをし、学級担任が T1 として授業実践を行った(表 3)。

## ④ダイアログの時間に関するシステム構築

### (7) 研修推進部の組織化

「英会話科」「ダイアログの時間」の 1 教科 1 領域での校内研究となり、研究主任への負担が大きかったため、研究推進部における組織化の提案をした。そこで、報告者が、新たに設けた「ダイアログの時間」の主任を補佐をしていく形で研究を進めることになった。このように、校内研修体制づくりを行ったことで、「ダイアログの時間」の対話スキル学習モジュールの時間とロングの時間で、役割を分担・協力しながら、準備を進めていけるようになった。

### (4) 校内研修会の実施

SEL-8S を実施するにあたっては、全教職員を対象に校内研修会を設定し、プログラムの概要や指導の実践について共通理解を図ることが有効である(香川・小泉, 2015)。そこで、児童用対話力アンケート(実践前)の結果をもとに、研究推進部に校内研修会実施を提案し、8 月 19 日に校内研修会を行った。その際、「ダイアログの時間」における校内研究の進め方や SEL-8S 指導に関する知識・留意点などについて、共通理解を図った。教職員が児童の対話力の実態を振り返り、今後の指導につ

表 3 ダイアログの時間実践内容(研究 I)と育てるスキル、SEL-8S との関係

回	月	内容	育てるスキル (関連する SEL-8S の 学習単元)	学校行事・他教科 ・他領域との関係
1	8	アサーションのしかたを考えよう	対人関係(C 伝える、D 関係づくり)	2 学期始業式
2	9	ワールドカフェをしよう	話し合いスキル(D 関係づくり)	学団会、敬老給食(コロナ対策の為中止)
3	10	気持ちを落ち着け、1 メッセージで伝えよう	対人関係 自己コントロール (C 伝える)	学活 「友達の呼び方と言葉づかい」
4	11	プレゼンテーションをしよう	伝えるスキル (C 伝える)	ふれあいまつり
5	12	自分や友達を見つめよう。	聴き方スキル(B 自己 他者への気づき)、対 人関係(D 関係づくり)	スポーツ集会、対話学習 「福津市協議会との討論」 (コロナ対策の為中止)

いて検討したことで、継続的な指導への教師の意欲づけを行うことができた。

### (9) 通信の発行

授業終了後、全職員に対し、「ダイアログの時間」と SEL-8S の周知を目的に研修だよりを月に 1 回程度発行し、配布した。掲載内容は、実施した授業のスキル・ポイントの要点、授業中の児童の様子、授業後の教師評価や感想、SEL-8S の特徴等の資料などであった。

### (3) 結果と考察

欠席者と回答に不備がある者を除く 41 名を分析対象とした。「小学生版『社会性と情動』尺度」

(1 回目)の回答の 8 つの下位尺度の平均得点の平均( $M=3.31$ )と標準偏差( $1/2SD=0.18$ )をもとに、上位 1/3 を社会的能力高群(以下、高群)(12 名)、中間位を社会的能力中群(以下、中群)(17 名)、下位 1/3 を社会的能力低群(以下、低群)(12 名)とした。

### 児童の社会的能力と対話力の変容

効果測定で用いた尺度等について、群(3)×時期(2)の分散分析を実施し、有意な交互作用が見られた場合に、下位検定を行った。その結果、「小学生版『社会性と情動』尺度」では「自己への気づき」「対人関係」で社会的能力低群児童の得点が上昇し、「他者への気づき」では社会的能力中群の得点が上昇していた。一方、「社会的能力全般」では社会的能力高群の得点が、下降の傾向が若干見られた(図 1)。これは、スキル学習によって評価基準が厳しくなり、相対的に自己評価が低くなった可能性が考えられる(宮原・小泉, 2009)。

児童用対話力アンケートでは対話力を構成する 3 つの下位尺度(話し方スキル、挨拶スキル、対人関係スキル)において、実践後の得点が有意に上昇していた。



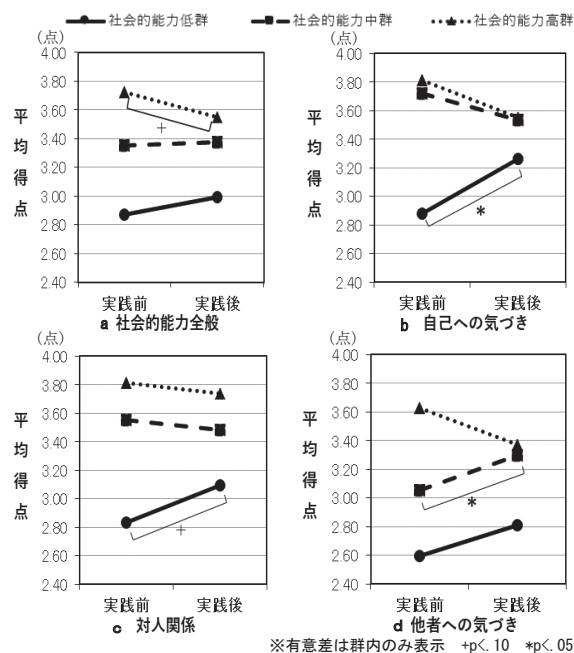


図1 「小学生版『社会性と情動』尺度」で有意な交互作用が見られた得点の変化

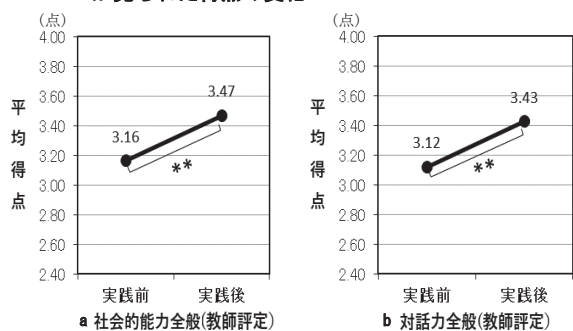


図2 社会的能力全般・対話力全般(教師評価)の得点の変化

### 教師の評価の変容

2クラスの「SEL 8つの能力[教師による評定]」の8因子と「教師用対話力アンケート」の9因子について、群(3)×時期(2)の分散分析を行った。教師による評定では、SEL 8つの能力の「社会的能力全般」の得点と教師用対話力アンケートの全項目の平均値(対話力全般)の得点が、有意に上昇していた(図2)。

### 各授業実施後の児童・教師アンケート

各授業実施後に、児童に対して、「スキルのポイントの理解」「ポイントを意識したエクササイズの有無」「ポイントの活用」について自己評価(4件法)を行ったところ、いずれも3.5点以上で概ね高い得点であった。また、授業実施後の教師評価は、どの授業の評価も概ね高い得点であった。児童・教師の自由記述からもポイント提示やロールプレイなどのSEL-8Sのよさを感じるとともに、日常や他の学習との関連について言及するなど、今後に対し前向きに捉える様子がうかがえた。今後の教

師の意識化を継続的にしていく必要がある。

### 算数科の授業観察

対象学級4年(24人)の実施前の授業の様子を観察したところ、数人の決まった児童のみが発表したり、教師の発問に応えたりする形で授業が進んでおり、全体的に学習中の児童の発言の回数の少なさが見られた。また、教師や友達の発言に対し、「相手を見て」「反応して(うなずき等)」など、話の聴き方について課題が見られた。

そこで、算数の授業において、観察時間を5分のインターバルに分け、それぞれのインターバル中の行動を記録するタイムサンプリング法で授業の行動観察を行った。そして、発言数において「児童の発言回数」÷「教師の発言回数」の5分間の平均を出すと、実施前(4年「面積」, 9月16日, 10時間計画の1時間目)は0.96(回/回)であったが、実施後(4年「小数のかけ算わり算」, 12月9日, 16時間計画の15時間目)は1.20(回/回)に増加していた。子どもの発言数が教師の発言数を上回る結果となった。このことから、「ダイアログの時間」において、話すことの対話スキル学習と日常的な教師の声かけにより、話すことに対する児童の学習意識が高まったのではないかと推測される。

また、教師の発問に対する「うなずき人数」の行動観察では、実践前14人から実践後19人に、「聴くときの目線(顔あげ)」の人数の行動観察では、実践前14人から実践後21人に増加していた。このことから、聴くことや話し合うことの対話スキル学習を実施し、学習に生かしていくことで、教師の問いかけに素早く反応するなど、話の聴き方に変化をもたらしたのではないかと考えられる。

これらのことから、SEL-8S追加指導案・教材を用いて、対話力に特化したスキル学習とそのスキルの日常化を図ることは、対話力の基盤である話し方・聴き方の向上につながると考えられる。

## 3 研究Ⅱ

### (1) 目的

在籍校全学年において、「ダイアログの時間」の年間カリキュラムを作成し、SEL-8S追加指導案・教材による実践の効果を検証する。

### (2) 方法

#### 実施期間

2021年1月～2021年12月

#### 対象

在籍校全学年児童(132名)と教師(12名)および

協力校の3～6年全学年児童（167名）

## 実施計画

モジュールの時間とロングの時間を関連づけた全学年分の年間カリキュラムの検討を行う。また、研究Ⅰの結果と児童の実態を踏まえ、改善・発展させたSEL-8S追加指導案・教材を児童に実施し、有効性を検証する。その際、校内研修への提案や対話スキル学習実施のためのマニュアル整備などを行い、学級担任の実践の充実を図っていく。

## 測定内容と測定方法

在籍校と協力校の3年以上の児童対象に、「小学生版『社会性と情動』尺度」を、実施前と実施後に実施した。また、在籍校全児童に対し、「児童用対話力アンケート」を用いて実践前後の調査を行った。さらに、対象学級の教師に「教師用対話力アンケート」を行い、実施前実施後に個々の児童について調査を行った。加えて、各授業実施後に、児童に対して、スキル学習への自己評価（4件法）を、教師に対して、授業の自己評価（4件法）を行った。その他の指標として、2・4学年の算数科、5学年の英会話科において、学習中の児童の様子を観察した。

## 実践の具体的内容

### ①評価指標（対話力アンケート）の提案・検証

研究Ⅰで作成した「児童用対話力アンケート」「教師用対話力アンケート」は、対話力を「話すこと」「聴くこと」「話し合うこと」「関係づくり」の4つの領域と細かに分けた9つのスキルにしていた。しかし、研究推進部との意見交換で、領域ごとのスキルの方が教師の見取りがしやすいことから、4領域4スキルに再構成した（表4）。また、「授業における対話力の見取りの観点」（表5）について、先行研究をもとに整理し、在籍校の研究推進部に提案をした。その観点をういて算数科・英会話科の授業について、実態調査を行った。

表4 教師用対話力アンケートの具体的評価項目

対話力の領域 「対話力の 4つのスキル」	1・2学年(低学年)	3・4学年(中学年)	5・6学年(高学年)
話すこと 「話し手スキル」	<ul style="list-style-type: none"> <li>・相手を見て話す。</li> <li>・相手に伝わるように、声の大きさや速さに気を付けて、話す。</li> <li>・相手に伝わるように、最後まではっきり話す。</li> <li>・自分の考えを理由をつけて、話す。</li> <li>・自分の考えを事柄の順序を考えてつくる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>【低学年内容に加え】</li> <li>・自分の考えを資料（絵や図など）を活用して話す。</li> <li>・相手に伝わるように、プレゼンテーションをする。</li> <li>・自分の考えを話の中心に気を付けて、考える。</li> <li>・自分の考えを、結論を先に述べ、根拠が明らかになるようにつくる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>【低・中学年内容に加え】</li> <li>・自分の考えを例をあげたり、経験をいれたり等、相手によく伝わるために、表現を工夫して、話す。</li> <li>・話の内容にあわせて表情やジェスチャーを使った話し方で、よりわかりやすく伝える。</li> </ul>
聴くこと 「聞き手スキル」	<ul style="list-style-type: none"> <li>・相手を見て聴く。</li> <li>・最後まで聞く。</li> <li>・反応しながら（表情で、身振り、手振り）で聴く。</li> <li>・相手をみとめる言葉をかけて聴く。</li> <li>・わからないこと・知りたいこと等を質問する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>【低学年内容に加え】</li> <li>・内容や相手の気持ちについて質問したり、確認したりして、話をつづける。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>【低・中学年内容に加え】</li> <li>・内容にあわせ、言葉で確認したり、要約したりして話をつづける。</li> </ul>
話し合うこと 「話し合いスキル」	<ul style="list-style-type: none"> <li>・話し合いに流れにそって、自分の考えを伝える。</li> <li>・友達の意見と自分の意見が「同じ」「違う」ということを考えて、話し合いをする。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・自分の考えを伝えたり、自分と異なる意見を受け入れたりしながら、折り合いをつけて話し合いをする。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・相手の思いを受け止めて聴いたり、相手の立場や考え方を理解したりして、話し合いをする。</li> <li>・多様な意見を生かして、自分の考えを変えたり、より深まったりする。</li> </ul>
関係づくり 「対人関係スキル」	<ul style="list-style-type: none"> <li>・挨拶のポイントを意識して挨拶をする。 （①立ち止まって②相手をみて③元氣よく）</li> <li>・簡単な自己紹介をする。</li> <li>・嫌なときは、人といえんかにならず、正しく伝える。</li> <li>・自分の言葉に気を付けて、相手がうれしくなる言葉を使う。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・挨拶のポイントを意識して挨拶をする。 （①②③に加え、④心をこめて）</li> <li>・自分を表す挨拶文を考えて、自己紹介をする。</li> <li>・自分がイライラしたとき、自分で解消する。</li> <li>・自分の気持ちをいうとき、相手の気持ちを考えた言葉に言い換えて伝える。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・挨拶のポイントを意識して挨拶をすることができる。 （①②③④に加え、⑤自分からはっきり）</li> <li>・相手とよい関係が作れるよう、工夫した自己紹介をする。</li> <li>・自分の気持ちをコントロールし、トラブルを解決する。</li> <li>・自分も相手も気持ちの大事にながら、相手に伝わる言い方で思いを伝える。</li> </ul>

表5 授業における対話力の見取りの観点

話す態度
1 相手を見て話す
2 聞こえる声の大きさ、速さで話す
3 表情・身振り手振り等を使って話す
4 最後まではっきり話す
5 話すためのツール（絵や資料等）を使って話す
話す内容
6 つながりを考えて考えを伝える
7 自分の考えを工夫して伝える（理由をつけて）
8 自分の考えを工夫して伝える（例・経験）
考えの再構成
9 新たな自分の考えが加わる
聴く態度
10 相手を見て聴く
11 相手の話を最後まで聴く
12 相手に反応して（表情・手振り・つなぎ）聴く
13 相手を認める言葉かけをして聴く
対話を続ける技術
14 バックトラッキング（繰り返し）を入れる
15 相手に質問する
16 適切な間をとる
17 質問に対してこたえる

### ②教育課程への位置づけ（「ダイアログの時間」年間カリキュラムの作成）

研究Ⅰで作成した3・4学年「ダイアログの時間」年間カリキュラムを、研究Ⅰの反省をもとに再構成した。そして、3・4学年と同様に、1・2学年、5・6学年の年間カリキュラムを作成した。年間カリキュラムには、4つの領域に関する4つのスキル（話し手スキル、聴き手スキル、話し合いスキル、対人関係スキル）を育成するために、SEL-8Sを配置した。また、対話スキル学習ロングの時間以外にも、モジュールの時間や対話学習、他教科・領域にSEL-8Sを組みこみ、学んだ対話力のスキルの定着を図るとともに、教育活動全体で社会的能力を育てることができるようにした。このカリキュラムを研究推進部に提案し、研究推進部が年度初めの職員会議で全体に提示した。そして、6月の全職員での主題研修と10月の研究推進部会議で、カリキュラムの見直しを行った。

### ③校内研修への提案

3月に校内研修会を行い、第3・4学年で試行

した研究Ⅰの内容、成果と課題について、報告者が職員全体に説明した。そして、今年度の「ダイアログの時間」における校内研修の方向性について全体で検討し、報告者が作成・提案した「教師用指導案集」を基に、実践していくことを確認した。

また、毎週火曜日の校内研修(主題研修)の時間には、英会話部とダイアログ部に分かれて、その月の「ダイアログの時間」対話スキル学習ロングの時間とモジュールの時間の内容や関連について協議できるようにした。その後、指導案や教材等とともに校内研修の協議内容を校内電子掲示板に載せ、情報を共有した。

#### ④SEL-8S 追加授業案・教材の作成・提案・実施

年間カリキュラムをもとに、毎月1単位時間に行われる「ダイアログの時間」対話スキル学習ロングの時間における全学年SEL-8S 追加指導案・

表6 ダイアログの時間の内容(研究Ⅱ)と育てるスキル、SEL-8S との関係

	回	月	内容	育てるスキル (関連する SEL-8S の学習単元)	学校行事・他教科 ・他領域との関係
1・2 学年 (低学年)	1	4	学級での基本スキルを知ろう	対人関係スキル(A 基本的生活習慣) 話し手スキル(C 伝える)、聴き手スキル(B 自己・他者への気づき聞く)	歓迎遠足、縦割りグループ顔合わせ
	2	5	いろんな言葉で自己紹介をしてみよう	対人関係スキル(D 関係づくり) 話し手スキル(C 伝える)	生活科「保育園児と芋苗をうえよう」、英会話科「挨拶をしよう」
	3	6	ふわふわことばとちくちくことば	対人関係スキル(D 関係づくり)	ウォークラリー集会、学校生活
	4	7	自分も相手も大切にしたい言い方をしよう	対人関係スキル(D 関係づくり)	縦割り活動「1学期活動振り返り」
	5	9	望ましいストレス対処法について考えよう	対人関係スキル(E ストレスマネジメント)	学級活動、モジュールの時間
	6	10	5W1Hに気を付けて話そう	話し手スキル(C 伝える)	生活科「保育園の子といもほりをしよう」
	7	11	話をつなごう	聴き手スキル(B 自己・他者への気づき聞く)	ふれあいまつり、生活科「わくわくらんど」「自分発見」
3・4 学年 (中学年)	1	4	学級での基本スキルを知ろう	対人関係スキル(A 基本的生活習慣) 話し手スキル(C 伝える)、聴き手スキル(B 自己・他者への気づき聞く)	歓迎遠足、縦割りグループ顔合わせ
	2	5	いろんな言葉で自己紹介をしてみよう	対人関係スキル(D 関係づくり) 話し手スキル(C 伝える)	総合「福津市のいいところをみつけよう」「西郷川プロジェクト」
	3	6	学級での話合いの仕方を練習しよう	話合いスキル(D 関係づくり)	ウォークラリー集会、学級活動「一学期のまとめの会をしよう」
	4	7	自分も相手も大切にしたい言い方をしよう	対人関係スキル(D 関係づくり)	縦割り活動「1学期活動振り返り」、総合「自然を楽しもう」
	5	9	望ましいストレス対処法について考えよう	対人関係スキル(E ストレスマネジメント)	学級活動、モジュールの時間
	6	10	ワールドカフェをしよう	話合いスキル(D 関係づくり)、話し手スキル(C 伝える)、聞き手スキル(B 聞く)	対話学習「地域のお助けマンになろう」(コロナ対策のため未実施)
	7	11	Iメッセージで思いを伝えよう	対人関係スキル(D 関係づくり)	ふれあいまつり、学校生活
5・6 学年 (高学年)	1	4	学級での基本スキルを知ろう(6年モデル演示)	対人関係スキル(A 基本的生活習慣) 話し手スキル(C 伝える)、聴き手スキル(B 自己・他者への気づき聞く)	歓迎遠足、縦割りグループ顔合わせ
	2	5	いろんな言葉で自己紹介をしてみよう	対人関係スキル(D 関係づくり) 話し手スキル(C 伝える)	英会話「留学生の人へ自己紹介をしよう」
	3	6	学級での話合いの仕方を練習しよう	話合いスキル(D 関係づくり)	ウォークラリー集会、学級活動「一学期のまとめの会をしよう」
	4	7	自分も相手も大切にしたい言い方をしよう	対人関係スキル(D 関係づくり)	縦割り活動「1学期活動振り返り」、英会話「留学生の方とユニセフについて話そう」
	5	9	適したストレス対処法について考えよう	対人関係スキル(E ストレスマネジメント)	学級活動、モジュールの時間
	6	10	ブレインストーミングをしよう	話合いスキル(D 関係づくり)、話し手スキル(C 伝える)、聞き手スキル(B 聞く)	対話学習「地域のお助けマンになろう」(コロナ対策のため未実施)
	7	11	トラブル解決の方法について考えよう	対人関係スキル(D 関係づくり)	ふれあいまつり、学校生活

教材を作成・提案した。ロングの時間においては、SEL-8S の基本的な進め方(インストラクション→教師のモデリング→スキルのポイントの提示→ロールプレイ・エクササイズ→フィードバック)を組み入れ、SEL-8S への理解を得ることができるようにした。また、板書用掲示物、学習プリント等、授業の準備物を研究推進部と協議して準備し、学校で統一して取り組むことができるようにした。このような工夫と準備をもとに、担任が T1 又は T2、報告者が T2 又は T1 で実施した(表6)。

#### ⑤学級担任における実践の意識化

研究Ⅰに引き続き、「ダイアログの時間」と「SEL-8S」の理解促進のための通信を毎月発行した。また、実践前には、報告者が授業者と実践内容について打ち合わせを行い、実践後の児童の見取り方について助言したり、学習したスキルを職員室の見える位置に掲示したりした。

#### ⑥対話力の日常化における提案

「授業における対話力の見取り」を具体的に実践可能なものにするために、報告者が算数科の先行研究を調べ、低学年・中学年・高学年に合わせ、児童の発話の見本や指導の仕方をまとめた「算数科における対話活動」を作成し、校内研修で提案をした。そして、算数科学習においても、対話活動を行うことで、対話の日常化を図った。

#### (3) 結果と考察

欠席者と回答に不備があるものを除く、実践群の1・2学年37名、3・4学年39名、5・6学年44名と統制群の3・4年56名、5・6年生91名を分析対象とした。

#### 児童の社会的能力変容

実践群と統制群の3・4学年、5・6学年で、「小学生版『社会性と情動』尺度」の8つの下位尺度について、群(2)×時期(2)の分散分析を行った。その結果、3・4学年について、「自己への気づき」「生活上の問題防止」に有意な交互作用が見られ、下位検定を行うと、「自己への気づき」については、統制群の得点が実践後に実践群よりも低下していた。また、「生活上の問題防止」では、実践群が有意に上昇し、また実践後に統制群よりも高い得点であった(図3)。5・6学年についても、「自己への気づき」に有意な交互作用が見られ、下位検定を行うと、実践前に統制群より有意に低かった実践群の得点が、実践後に有意に上昇していた。

これらことから、対話力向上を目的としたSEL-8S 追加指導案・教材を作成し実践することは、社



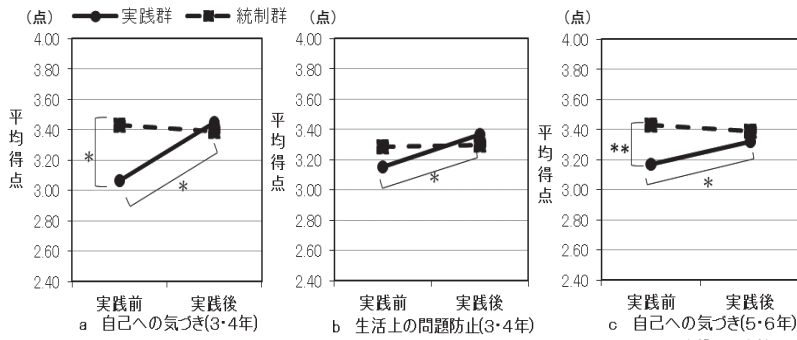


図3 「小学生版『社会性と情動』尺度」における有意な交互作用がみられた児童の社会的能力の変容

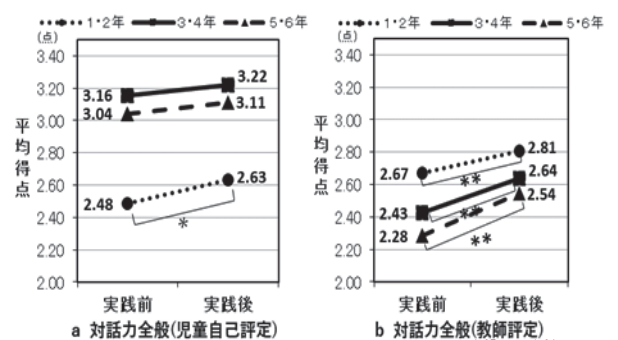


図4 対話力アンケートにおける対話力全般の平均得点の推移

会的能力の一つである「自己への気づき」を促すことができることが推察された。

### 対話力(児童・教師)の評価の変容

在籍校全児童を対象に、「児童用対話力アンケート」の4つの因子について、実践前後のt検定を行った。その結果、対話力全般(児童自己評定)の平均得点は、全学年で上昇していた(図4)。また、1・2学年、3・4学年、5・6学年において、対話力のいくつかの下位尺度で、平均得点が有意に上昇し、その内、全学年の「聴き手スキル」で、有意な得点上昇が認められた。

在籍校の担任教師を対象に実施した「教師用対話力アンケート」の4つの因子で、実践前後のt検定を行ったところ、対話力全般(教師評定)の平均得点は、全学年で有意に上昇していた(図4)。対話力の下位尺度において、1・2学年は「聴き手スキル」で、3・4学年と5・6学年は全ての下位尺度で、実践後の得点が有意に上昇していた。

これらのことから、SEL-8S 追加指導案・教材の実践を計画的に行うことは、対話力の下位尺度である「聴き手スキル」をはじめ多くの尺度で効果があると考えられる。ただし、児童の自己評定と教師の評定結果に違いがあることから、児童が自身のスキル向上に気づくことができるような教師からのフィードバックが必要であるとする。

### 各授業実施後の児童・教師アンケート

各授業実施後に、全児童に対して、「スキルのポ

イントの理解」「ポイントを意識したエクササイズの有無」「ポイントの活用」について自己評価(4件法)を求めた。各学年の平均は全て 3.5 以上の高い得点であった(図5)。また、今後のスキルのポイント活用への前向きな記述がみられたことから、児童は SEL-8S の実践のよさを感じており、今後の活用に対して意欲が高まったと推察される。

また、授業実施後の教師評価は概ね3以上であり、日常化への具体策が記述してあった。これらのことから、学習にスキルのポイントを位置付けることと、日常化にむけた教師への働きかけの有効性が示唆された。

### 算数科・英会話科の授業観察

2 学年算数科、4 学年算数科、5 学年英会話科において、観察時間を1分のインターバルに分け、それぞれのインターバル中での観察児童の対話の状態を記録するタイムサンプリング法で授業の行動観察を行った。その際、「授業における対話力の見取りの観点」(表5)をもとに、17の項目の出現頻度を計測し、「話す態度」「話す内容」「考えの再構成」「聴く態度」「対話をつづける技術」の5観点ごとに平均をだした。算数科において、実践前(2年「かさ」、6月3日)(4年「図を使って考えよう」、6月15日)と実践後(2年「どんな計算になるのかな」、12月9日)(4年「小数のかけ算」、12月7日)を比べると、話す内容以外全ての観点上昇していた(図6)。また、英会話科において、実践前(5年「ホームパーティの計画をたてよう」、6月9日)と実践後(5年「日本のイチオシを紹介しよう」、12月9日)を比べると、どの観点も増加していた(図6)。

このことから、「ダイアログの時間」において、SEL-8S 追加指導案・教材を用いて、対話スキル学習を行うとともに、教師が日常的な授業にスキルを生かすように仕組み、スキルの積み重ねを行うことは、対話力の向上に関係すると推察される。

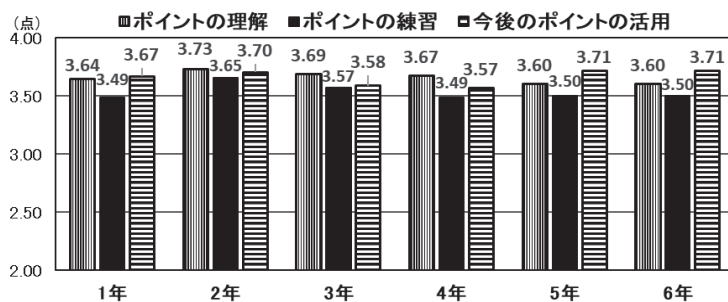


図5 授業実施後の児童アンケートの項目ごとの平均値

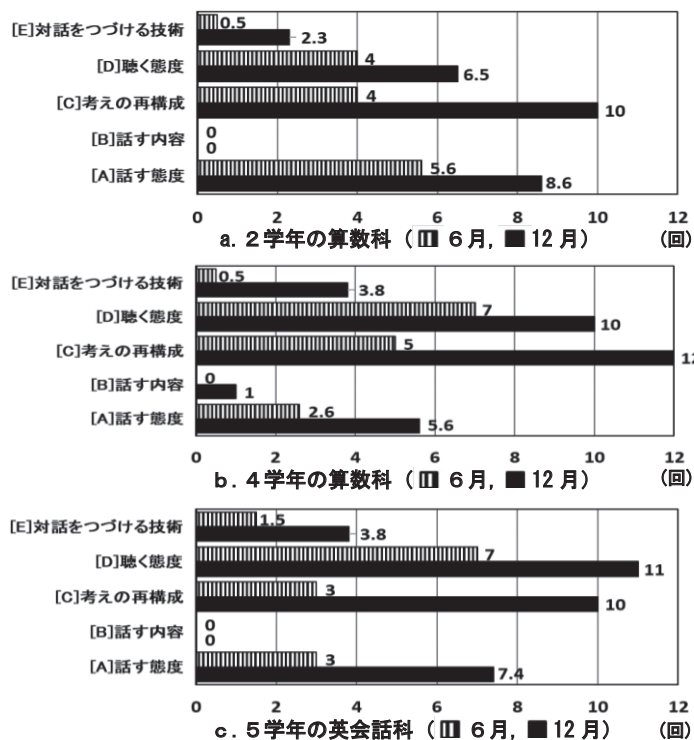


図6 授業観察における対話力の見取り5観点の出現頻度

#### 4 まとめと総合考察

本研究は、「ダイアログの時間」において、年間カリキュラムを作成し、SEL-8S 追加指導案・教材を提案・実践することで、対話力の向上に効果があるかどうかを検証することを目的とした。研究Ⅰでは、第3・4学年で試行した結果、「自己への気づき」「対人関係」で社会的能力低群の児童の得点が上昇し、「他者への気づき」では社会的能力中群の児童の得点が上昇していた。また、対話力を構成する3つの下位尺度も有意に上昇した。研究Ⅱでは、全学年児童に実践し、協力校(統制群)と比較すると、「自己への気づき」「生活上の問題防止」で実践校の得点が有意に上昇していた。また、対話力に対する児童自己評定・教師評定において、下位尺度のほとんどの得点が、実践後有意に上昇した。

これらの結果から、カリキュラムを開発し、SEL-8S 追加指導案・教材を作成・実践していくことが、多様な他者と円滑にコミュニケーションを図る態度や能力である「対話力」の向上につながることを示唆された。さらに、各授業後の児童・教師アンケートにおけるスキルのポイントの推移や算数科・英会話科での授業観察結果からも、SEL-8S のポイントを理解し、教師が意識的にスキルのポイントを学習に組み入れ、指導を積み重ねていくこ

とが必要であることが推察された。

最後に、本研究の課題を述べる。1 点目は、教師の実践力・意識化の向上である。今回の研究では、児童の対話力向上に向け、SEL-8S 追加指導案・教材の有効性に対する教師の考え方の違いや、学んだスキルを日常的・計画的に育てていこうとする意識に差が見られた。田中・小泉(2007)は、SEL プログラムのスキルや態度の強化・一般化を促すためのアプローチの一つとして、「教師が育てたい児童の姿を明確に持つこと」を挙げている。全ての教師の意識化・実践力向上には、職員研修において意見交換の場の設定や授業交流も行いながら、目指す児童像を共有する必要がある。

2 つ目は、学習者である児童の実践の動機づけである。スキル学習の良さは感じているが、自ら日々の学習や生活に生かす状態には至っていない。そこで、学んだスキルを活用し体得していくために、学習場面でスキルを用いた対話活動を行ったり、生活場面でスキルの活用を振り返ったりする機会を設けて、実践への意識化を図ることが求められる。

本研究では「ダイアログの時間」年間カリキュラムを作成することで、教育課程への位置づけの基礎を培うことができた。今後も児童の対話力向上のために、目指す児童の姿を見据えた横断的な学習内容の組み立てについて、再検討・再構築をしていきたい。

#### 主な引用文献

- 香川尚代・小泉令三 (2015) 小学校での SEL-8S プログラムの導入による社会的能力の向上と学習定着の効果 日本学校心理士会年報 (日本学校心理士会), 7, 97-109.
- 上西郷小学校 (2020) 令和元年度研究開発実施報告書
- 小泉令三 (2011) 子どもの人間関係を育てる SEL-8S①—社会性と情動の学習 (SEL-8S) の導入と実践— ミネルヴァ書房
- 宮原紀子・小泉令三 (2009) 中学生の学校行事と関連づけた社会性と対人関係能力の向上 福岡教育大学教育実践研究, 17, 143-150
- 清水裕士 (2016) フリーの統計分析ソフト HAD:機能の紹介と統計学習・教育, 研究実践における利用方法の提案 メディア・情報・コミュニケーション研究, 1, 59-73
- 田中展史・小泉令三 (2007) 社会性と情動の学習 (SEL) プログラムの強化・一般化に関する試行的実践—教科等との関連づけ, 目標の個別化, 保護者との連携を通して— 福岡教育大学心理教育相談研究, 11, 73-81.
- 田中芳幸・真井晃子・津田彰・田中早 (2011) 小学生版「社会性と情動」尺度の開発 子どもの健康科学, 11 (2), 17-30

#### 謝辞

本研究に際し、機会を提供してくださった福岡県教育委員会及び福津市教育委員会、また、在籍校や協力校の校長先生をはじめ、ご協力していただいた全ての先生方に、心より感謝申し上げます。